

## 浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

### 第 122 回 (2019. 6. 3) の要旨

拝読文(『真宗聖典』67 頁)

また尊貴・豪富・高才・明達なるあり。みな宿世に慈孝ありて善を修し徳を積みて致すところなるに由りてなり。世に常の道、王法の牢獄あり。肯て畏れ慎まず。悪を為して罪に入りてその殃罰を受く。解脱を求望すれども免出を得ること難し。世間にこの目の前の見の事あり。寿終わりて後世に尤も深く尤も劇しくして、その幽冥に入りて生を転じて身を受く。たとえば王法の痛苦、極刑なるがごとし。かるがゆえに自然の三塗無量の苦惱あり。転たその身を賢え形を改め道を易えて、受くるところの寿命、あるいは長くあるいは短し。

\*\*\*\*\*

『無量寿経』(下巻)には、三毒段、五悪段が出てきます。この段には、中国の思想がかなり色濃く入っているのではないかという疑問が出されています。また『無量寿経』の現存する梵本にはこの段がない。だから、この部分は中国選述ではないかともいわれます。

そもそも、経典とはどういうものか。仏陀が御在世のころには経典はありません。仏陀はご自分でいただかれた宗教的な救い、覚りを折々にお話され、仏弟子たちはそれを何とか領解しようとされた。しかし、まだ仏陀がおられますから、師匠である仏陀について自分なりに考察することが可能であったわけです。

ところが、仏陀が 80 歳という寿命でお亡くなりになる。いよいよ仏陀が亡くなるというときに仏陀自身が、あなた方は仏陀を単なる人間と見てはならん。仏陀が仏陀である所以は覚られた法にある、と遺言された。「法に依りて人に依らざるべし」と。つまり法に依るべきであって、釈尊という人間に執われてはならないのです。

そういうわけで、仏陀が亡くなられたということを機縁にして、法とは何であるか、そしてどういうふうにならに人々に伝えていくべきかということになり、お経を作る作業が仏弟子たちによって始められた。その当時は、説法はただ耳で聞くだけであって、記録は何もありません。説法の内容を議論しながらまとめていくのです。

仏弟子たちの仕事となるのは「如是我聞」です。つまりどう聞いたかを、議論しながらまとめ上げるところから、経が生まれた。伝えられるべきものとしての、仏陀の思想内容がはじめて言葉として記録されます。それが仏教として伝承されてきました。経典は翻訳を通して中国に伝わり、中国の仏弟子たちからも新たに「如是我聞」が生まれてきます。生きた仏教が人を生み出せば、生まれた人がまた仏教を領解しなおして伝えていく、これが仏教の歴史になったのです。ですから当然、この三毒五悪段は中国で吟味された本願の思想ということになる。さらにそれが日本に来れば、日本で領解され、日本における思想としての仏教が人々を救う内容として展開します。

だから、日本の仏教は仏教ではない、インドの仏教こそ仏教だなどと言うのではなく、生きた思想として如是我聞されてこそ、仏教として意味をもつわけです。古い思想に帰っ

たから本当だということではない。そういうことが大事です。ですから今生きる我々が、この五悪段の教説が伝えようとしている内容を聞く努力をしてこそ、教えとしての意味があると思います。

三毒段の一番最初に「五悪・五痛・五焼」（『真宗聖典』66頁）とある。それに対する五善の内容として「福德、度世・長寿・泥洹」（同頁）とあります。世間の在り方としては五悪・五痛・五焼です。それは「劇苦」と感じられる生活をあらわす。この五悪を止めて五善になった場合は福德だと。その内容は、度世・長寿・泥洹といわれる。度世・長寿・泥洹は五悪・五痛・五焼に対応する関係をもつ。

度世は五悪に対応します。度世とは世を渡っていくことですが、単なる世渡りではなく、この有限の命を突破することです。有限に執われない在り方を自覚的に求め、そしてその智慧を開く。ですから単に世を渡るのではなく、世を超えるという意味をもっている。苦しみながら生きる日常を突破する方向を教えようとしている。仏教の大事な方向性です。そういう方向性こそ、劇悪極苦であるこの世を生き、それに耐えうる思想、信念あるいは開けとして必要なのです。

長寿は五痛に対応します。痛みを感じることにおいて本当に命を生きることが成り立つ。『無量寿経』の無量寿とは、単に時間が長くなるという意味ではない。私たちが本当に命を生きるとき、たとえ一瞬であっても無量寿の意味を与えられる。そういうことがここでは長寿と言われているのです。

泥洹は五焼に対応します。泥洹とは、涅槃、寂靜、寂滅のことです。元々の意味では命の火が消えるという意味です。釈尊が亡くなることを入涅槃といいます。大乘仏教が展開するなかで、生死即涅槃という言葉も生じてきます。つまり苦悩の命がそのまま涅槃なのだ。苦悩の命と別に涅槃があるのではない。凡夫の眼で見るから苦悩なのであって、仏陀から見れば涅槃なのだ。釈尊はそのような涅槃を説いたのです。しかし、そのような涅槃にいかにして入るのか。大乘仏教では様々な議論がなされています。

仏教の辞書にはいろんなことが書いてありますから、了解することはなかなか困難です。ああでもないこうでもない議論されていて、大変複雑に見えます。しかも、全部が交互に関係し合って連関している。仏教は超越をあらわそうとしているのだから、有限な理性で分かるようにするには、どうしても距離感があってなかなか、その意味に到達できない。そういうあがきに私自身、長い時間を費やしています。

経典は何回読んだから分かるというものではない。私たちが迷いの言葉で分かるようにすると、釈尊が覚りの内容を言葉にしようとするのと、まったく行き違いが生ずるわけです。親鸞聖人は、大事なのは「聞」、聞くことだと。聞くとはどういうことかという、向こうから言おうとしている大悲のはたらきに耳を澄ますことなのです。こっちが自分を中心に考えて分かるようにして分かるものではない。この五悪段では煩惱に生きている衆生の苦悩の実態と、それを翻して何とか衆生に利益を施そうとする釈尊の言葉とが語られているのです。

ですから、他人のことではなくて自分自身のこととして聞く。自分自身の苦悩の内容を言い当てる言葉として聞くことが大事です。他人の苦悩として読んでしまったのでは、教えの言葉が自分のためのものでなくなってしまう。ここの箇所は、苦悩の事実を押さえる言葉が連続しています。苦悩にまみれて生きる現実が人間にあるわけです。

次に「**また尊貴・豪富・高才・明達なるあり**」という言葉があります。「尊貴」とは尊敬され、または身分が高いという在り方です。「豪富」の「豪」は力が強いということ。当然そこに「富」、つまり財が集まる。だから「豪富」です。

この世には人間存在が生み出した様々な差別がある。仏陀からするとあってはならないはずの差別が当然のごとくに起こっている。仏陀は一如平等を説いています。覺りを開いて命を見れば存在は皆平等に輝いているのだと。命はみんな平等なのだというふうに仏陀はご覧になって、そのように生きようとされた。だから、仏弟子として僧伽に入れば、皆平等なのです。存在の平等性に気づいてほしいという願いがあったから、人間関係の中に平等を作ろうとした。しかし、僧伽が大きな集合体になり、また時間が経ち、他の民族のところに伝わっていくと、どうしてもまた差別が生ずる。人間はそういう矛盾を抱えている、やっかいな存在なのです。ですから、凡夫としての限界とそれを突破させようとする存在の平等性の呼びかけとが、いつもぶつからざるを得ない。これが仏教の歴史なのではないかと思えます。

「高才」というのも、世渡りがうまいとか、記憶力がいいとか、才覚が発達しているというようなことで、人間においては価値として評価されるわけです。

「明達」の「明」とは、知恵の明るさです。この場合は凡夫としての知恵です。賢いことによって明るいということもあり得る。こういうことが、この世で生きる時の価値として言われる内容になります。どうしても比較相対の概念です。比較するということが煩惱なのです。煩惱は人間を苦しめます。この段は人間の苦悩を言い当てる言葉と、人間が楽しいと感じて生きる場合に当てはまるような言葉とが対となっている。

それを結んで「**みな宿世に慈孝ありて善を修し徳を積みて致すところなるに由りてなり**」といわれます。前の命を物語的に「宿世」というのです。身近にいえば、過去のことです。この物語的な過去世は、文字通りの過去世ではなく、過去の生活内容が現在の我々に響いてきていることを言い当てる言葉です。

「**世に常の道、王法の牢獄あり。肯て畏れ慎まず**」。世の王に定められた法律によって、我々は縛られます。国法、あるいは倫理的な法をおそれず「**悪を為して罪に入りてその殃罰を受く**」。悪業を作ることが苦悩を引く。法を犯した場合には法に背いた罰を受ける。こういう因果関係です。

そして「**解脱を求望すれども**」と続きます。解脱とは、煩惱からの解放という意味です。この場合は、牢獄の縛りからの解脱ですから、苦悩で縛られてある在り方から解放されようという意味をもった言葉だろうと思えます。

求めて望むけれども、しかし「**免出を得ること難し**」。免れることができない。だから、解脱できない。「**世間にこの目の前の見の事あり**」。世の中で目前に見て分かる、そのような事実がある。「見の事」とはそこに現れて見ることのできる事実をいう。

仏教では見仏が願われることがあります。見仏とは、肉眼で仏を見るということではない。仏陀の心、大慈悲に遇うことなのです。仏陀はどこにいるか。それは大悲の中なのです。本願力に遇うとは教えを聞き、つまり「聞其名号」して、名号の中にこそ本願の大悲が込められてあるのだと聞くのです。

それがなかなか聞きがたい。現代の我々からすると仏の名に功德があるなんてさっぱり分からない。聞こうとしなければ聞こえないのです。人生をかけてでも聞きたいというほどの、真剣勝負があってはじめて聞こえてくるものがある。

あるいは神秘体験のようなことで、仏を見たという場合もある。しかしそういうことを親鸞聖人は信頼しない。どこまでも凡夫の生活の中で大悲に遇うのだと、こういうふうにいただいでいく。それが名号を聞くということなのだ。

「寿終わりて後世に尤も深く尤も劇しくして、その幽冥に入りて生を転じて身を受く」。ここで「宿世」に対して「後世」ということが出てきます。「世」というと、今では空間的なイメージが強いですが、三世という時間のなかの概念なのです。歴史といってもいい。

文字通りに読めば、今の命が終わって次の命においては、苦悩が増幅されて「幽冥」に入るといわれています。「幽冥」とは暗さです。「冥」とは、見えない存在ともいえます。代表的なものを身近に言えば、亡くなっていった人たちです。冥衆という言葉は、亡くなっていった見えざる存在がどこかで感じられることをいうのでしょうか。冥衆を感じることは、命の本質にあると思うのです。崇りや罰をおそれるのではなく、むしろ護られる。どうぞ許してほしいと言える存在として我々が立ちなおることが、親鸞聖人が教えようとした冥衆護持の利益なのですね。そういう冥衆を否定したら、人間の生きる在り方が薄っぺらになってしまうと思うのです。

現代の都市文明はそういう命の感覚をむしろ排除する面が強い。けれども、見えざる存在が現在を支えている。我々も見えざる存在となった時に未来の人々に何が遺せるか、そんな発想をすべきではないか。こういうことがやはり大事になってくるのではないかと。

現在だけが勝負ではない。過去もあり未来もある、その中に今がある。現在には過去世と未来世とが絡んでいるのだから、現在は必ず過去にも未来にも響く。こういう関係が、業という言葉の大事な意味だと思います。だからここに「宿世」、「後世」とあるけれど、これは文字通りにそういう時間があるということを言っているのではない。現在の行為の大切さを呼びかけていると思うのです。

「たとえば王法の痛苦、極刑なるがごとし。かるがゆえに自然の三塗無量の苦悩あり」。「三塗」とは地獄・餓鬼・畜生という、苦悩の命の象徴です。そういうところに「**転たその身を賢え形を改め道を易えて、受くるところの寿命、あるいは長くあるいは短し**」と。「転」という字をうたたと読みます。まるで転がるようにその身をかえることをあらわしています。命は必ず身と共にありますよね。我々に寿命が与えられて生きているということは、身体が与えられるということとひとつです。赤ん坊の身体をいただき生まれ、亡骸として命を終える。そして自然に帰るわけです。

「身を賢え形を改め道を易え」。六道という言葉があるように、状況と共に変わりゆく存在を言い当てようとする言葉です。安田理深先生は、私たちは状況的存在だといわれました。状況によって変わっていくのが我々だと。それを物語的には六道というのです。普通には命が変わっても自分が残るのだと思いたい。そういう執着が自我という思想を生み出している。しかし、自我はないものだといふ陀は説かれたのです。

文責：東真行（親鸞仏教センター研究員）